北海道 海外子女教育教師の会 会報

第 7 号
北海道海外子女教育教師の会
代 表 千葉 福男
事務局長 磯貝 登
事務局 中村 保

『たくましく世界に生きる子供の育成を目指して』

―身近な国際理解教育―

第8回北海道国際理解教育研究大会が、去る8月28日・29日の両日旭川市において開催されました。

厳しい国際情勢のもとにあって、国際社会に適応する豊かな日本人の育成の必要が今ほどさけばれている時はありません。

私達は、言語、風俗、習慣等を異にする異文化のなかに生活し、世界各地に暮らす様々な個性、能力、体験を持つ日本の子供の教育に取り組んでまいりました。そうして、その経験から、民族や国家を越えた一人ひとりの人格を認め合い尊重し合うことこそ世界に通じる人間の育成のための教育の原点である事を学んでまいりました。

本大会主題は、このような教育の原点に立ち、毎日の教育活動の中で「今、我々は何をなすべきか」を考えようと設定したものであります。授業研究はその実験的な試みの一つであり、このような試みを通して国際理解教育のありかたを求めることが、本大会の目的でした。

三分科会の内容

第1分科会

テーマ　これからの教師に求められるもの

・国際理解教育のありかた
・国際化への実践研究

＜佐藤新吾先生（札幌市立八軒西小学校）＞

札幌市立八軒西小では、約1年半前から国際理解教育部門ができ、『自分たちの国や文化と違ったものにふれることによって、国際的視野を持った子どもを育てることができる』という仮説のもと数々の実践例が発表され、また、帰国子女の指定校としての積み重ねから、「言語指導カリキュラム」「国際理解カリキュラム」の紹介と実践が発表された。

＜中林栄一郎先生（網走市立網走小学校）＞

網走市立網走小では、昭和53年より国際理解についての学習、国際交流の体験を深めている。ブラジル松柏学園との交流・カナダとの交流、ブラジル派遣・カナダ派遣等を通して、真の国際理解というのは、頭脳での理解でなく「心での理解」が重要であると、子どもたちの体験、父母のアンケート等たくさんの資料をもとに発表された。

<細川道子先生（江差町立南が丘小学校）>

国際理解教育を教育課程の中に位置づけることは難しいとしながらも、海外から帰国された学校長との国際理解の時間を設定して実践している例、国際交流の集いの実践例、道徳の授業の中に、日本の文化を素材として、自国の文化のよさ、すばらしさを知ることにより、他国の文化を理解し大切にすることにつなげる授業の実践例の発表を通し、『国際理解教育の根幹にあるものは、人間理解、豊かな人間性の育成にある。』『教師自らが、時代変貌を的確にとらえ、内外社会の変化と発展に適応できる国民の育成に努めなければならない』と提言された。

<和島徹男先生（旭川市教委・指導主査）>（助言者）

1.国際理解教育は、誰でもやっている事である。同じ共通点を見つける事も大切である。
2.仲間に呼びかける働きかけ
3.動かない事実を作る。・・・各教師が行っているものの中で国際理解教育を認める事が大切
4.広げるため、仮説・実践・記録のミニレポートをたくさん作り、情報交換をすべきである。地域、行政を巻き込む事。

第２分科会

テーマ　僕たち、私たちから見た外国と日本

・文化、風俗、習慣、考え方の違い
・外国から見た日本

第２分科会では、生活、文化、風俗、習慣など異なる社会で生活した海外での経験をもとに、また、海外から見た日本について問題点を提起し合い、身近なところから国際理解の輪を広げることを試みた。

ここでは、幼児期・小学生・中学生時代にかけて海外で３年間生活したり、最近２週間位外国でホームスティを経験した中学生を含め、小学校３年生から中学生・高校２年生までに成長した合計17名が集い、内容豊かに活発な話し合いが行われた。17名の滞在地は、アフリカのナイジェリア国ラゴス、オーストラリア国パース、東南アジアのバングラデッシュ国ダッカ、中華民国の台中、ホンコン、ヨーロッパのイタリア国ミラノ、中央アメリカのコスタリカ国サンホセ、コロンビア国ボゴダ、パナマ国パナマの10ケ国であった。

・ 外国での第一歩

「どこを見ても山が見えなかった」「まわりの人が全部黒人であった」「素手でごはんを食べていた」「車が右側を走っていた」「鉛筆の削り方、顔の洗い方、手招きが違い、おつりの渡し方が反対であった」など直視して驚いたことを素直に述べていた。

・ 現地の生活に慣れてきた中においては

「表情、表現がずいぶん豊かであった」「貧富の差が激しかった」「子供が学校に行かないで働いていた」「ベランダや窓から平気で物やゴミを捨てていた」「親にたのまれて酒やタバコを買いに行っても店では子どもに絶対売ってくれない」など、生活習慣の違いや規則の違い、経済状態の違いなどによく目を向けて生活していたことがうかがわれた。

・ 現地の人々の言動でゆるされないことについては

「日本人を見ると目をつり上げてバカにする」「第二次大戦のときのこ

とを今も根に持っていて、物をぶつけたり、水をかけたりする」など、厳しい中での生活を述べ、人間として交流していく上で大切な、基本的人権に関した事柄が多く出された。

・私たちが見習わなければならないことでは

「はい、いいえをはじめ、自分の言いたいことをはっきり言っても気にしない」「学校では制服がなく自由な服装であっても、生徒達はひどい服装をする者はなく、きちんとわきまえた服装をしていた」「外人は、人の目を気にしないで行動する」「人種にこだわることなく、世界のいろいろな人種の子供たちで野球のチームを組み、楽しく試合ができた」など述べられ、解放的な中に規律やわきまえ、他人の目を気にせずに生活できるということからか、出席児童生徒数17名のうち12名(70.6 %)が日本より外国の方がよいと答えた。

・私達日本人は、外国人とつき合うとき、どのようなことについて心がけなければならないかでは、

「人間は同じなのであるから日本人とつきあうのと同じように普通につきあうようにしたい」「自分から進んで話しかけ積極的に外人と接していく態度が大切」「外国語、言葉を覚えること」「自分が日本人であるという誇りを持って意志表示ができることが大切」などなど、言葉を身につける大切さ、日本人としての自覚、積極的に働きかける態度の必要性を児童生徒の目から見ても大事であるということがうかがい知れた。

＜稲崎　進先生（上川教育局指導主事）＞（助言者）

滞在国の実態を肌で感じ体験したことを、大変立派に話していただいた。話していただいた生々しさ、厳しさは、大人も大事にしていかなければならない。私達の身の回りの大部分は、外国のお世話になっている。外国の情報も24時間日本に入ってきている。人と人のつながり、心のつながりがこれから一層大切になってくる。体験や経験を自分の中だけにとどめないで積極的に生かしていただきたい。

＜坂下晃一運営委員長（士別市立士別南小学校長）＞（助言者）

社交的、他人の目を気にしない、レディファースト、自由など、日本に比べて解放的であるためか、外国の生活の方がよいという人が多いが、子ども達が解放的であるということは、自律的であるということ、自律性を身につけることが大切である。今後の社会で子ども達がコミュニケーションを国際交流の手段として身につけることが大切である。

第３分科会

テーマ　在外教育施設の現状と課題

・日本人学校の現状報告

・日本人学校を通してみた課題

＜板垣　修先生（千歳市立日の出小学校）＞（ジャカルタ日本人学校）

児童生徒が 900人余りの大規模校であるジャカルタの学校の特色、家庭の特質、帰国後の親の不安、そして異国の文化、生活の中に入り、そこに暮らす人々をしっかり見つめた上で考える人間観は得がたいものであり、習慣や風習の事情をしっかりとふまえ、理解することの必要性があるとの提言。

＜三谷　興先生（旭川市立陵雲小学校）＞（ソウル日本人学校）

学校の現状、現地社会との交わり、そして生活全般に不安のある中での教

育。国際理解とは、まず相互の異文化社会にどっしりと身を置いて個人レベルでの信頼関係をつくり上げていくことにはじまるのではないかとの提言。

＜庭瀬一美先生（美深町立美深中学校）＞（ミラノ日本人学校）

児童生徒数 140人余りの学校の現状、現地理解教育の内容について、そして、教育諸活動の問題点について提言。

その後、20分余りの短時間ではありましたが、道徳的価値観の相違、現地との交流のあり方（生徒、父母、教師）、進学問題、対日感情は？とたくさんの質疑が行われ、最後に、異文化の違いを頭に、それを受け入れ、現地にとけこんでいく中での教育が大切であるとまとめて、終了。

研究部長より基調報告

研究主題と研究実践の基調

1．国際社会に生きる日本とその立場
　(1) 国際理解の現状とその必要性
　(2) 国際理解教育に求められるもの
　(3) 研究主題設定にあたって
2．研究の流れと課題
　(1) 研究の経過
　(2) 研究内容と取り組み
　(3) 今後の課題と方向
※　国際人育成樹

初めての公開授業

※小学校　田山　　裕先生
（旭川市立忠和小学校）
「パン」（小2）

・道徳教材から子ども達の心情にせまり、身近な問題から世界にはいろいろな人が生活していて困っている人も大勢いることを理解させ、自分たちに何ができるかを考えさせ、古切手収集の活動に発展させたすばらしい授業でした。

※中学校　南　　信義先生
（旭川市立永山中学校）
「身近な国際交流」（中3）

・外国人との交流会を契機に夏休みの課題としてグループで「身近な国際交流」を調べ、外国人との相違点や類似点をつかみ、これから自分達はどのように生活をしたらよいか追求した授業でした。

記念講演

演題「韓国の教育の現状　日本の教育」

講師　駐札幌大韓民国総領事館領事
崔　　相洛　　氏
（チエ　　サングラク）

韓国の教育の問題点
(1) 勉強競争が激しい
(2) 学力重視（社会では協同を望んでいる）
(3) 勉強が嫌いな生徒が多い
(4) 幼児教育が遅れている
(5) 評価の問題（創造力が分からない。活力がわからない。奉仕の精神は測れない。）

日本の教育の欠点
(1) 平均的人間を作っている。
(2) 日本の大学はダメだ。
(3) 創造性を窒息させる教育制度。
(4) 人間性の教育の欠如（生命を軽々しく扱う）